

別子鉱山史の留意点－追加1

令和3年7月11日 坪井利一郎

白井智子の「別子銅山古文書に見る明治初期の生野銀山と別子銅山の相互関係－お雇い外国人コワニエと広瀬幸平の交流を通して」(仏蘭西学研究39号 2013年)を読む。その中に何点か新事実が掲載されていた。

白水丸とルイ・ラロック

広瀬幸平の「半世物語」には、ルイ・ラロックが和船を嫌ったので汽船を購入したと記述しているが、白水丸を購入したのはコワニエに別子銅山を視察に来てもらうためであった。広瀬は、フランス人技師のルイ・ラロックとコワニエを記憶間違いしたままで書いた。

コワニエの別子銅山視察は多忙のために延び延びになっていたが、ついに実現する。

明治5年 9月 5日 工部省へコワニエの別子銅山への派遣視察を懇請する。

明治5年 10月 8日 聴許となる。

明治5年 11月 イギリスの汽船を購入して白水丸と命名する。

明治6年 1月 27日 広瀬は生野に出張。コワニエに直接要請のため。

明治6年 6月 3日 生野出発

住友友親・広瀬幸平が白水丸で飾磨港で迎えに来る。

6月 4日 新居浜港に着く

6月 13日 新居浜港から飾磨港、姫路から生野に帰山する。

増田芳蔵のフランス留学

別子鉱山目論見書の実施に当たって、塩野門之助と増田芳蔵をフランスに留学させた。塩野はルイ・ラロックの通訳をしたからフランス語ができるからであった。

広瀬が明治元年9月～明治2年1月まで生野銀山に出司した後に、岡田梅蔵と増田芳蔵を生野鉱山学校に送り、コワニエから鉱山学とフランス語を学ばせる。増田はフランスを学んでいたからフランスへの留学生に選ばれた。

火薬のわが国での初使用

広瀬は生野銀山出司中にコワニエから火薬採掘法を学んだ。別子銅山に帰山し、生野にも負けじと近代化したいとの強い意志から第一通洞開削で火薬を使用したのは、厳密に云うと「我が国の民間鉱山で最初に火薬を使用した」となる。コワニエは生野銀山で日本で初めて火薬を使用している。広瀬は明治4年4月に再び生野銀山への出司が命令され、6月2日に着任する。8月頃になるとコワニエと懇意になる。コワニエの別子視察へと展開。